

# 『堤中納言物語』 「逢坂越えぬ権中納言」 論

——生成・享受の「場」との関係——

陣野英則

## 一 はじめに——『堤中納言物語』の短篇性——

『堤中納言物語』に含まれる十篇の物語の短篇性に関して先鞭をつけた玉上琢彌氏の論考では、これらの短篇が『源氏物語』成立以前の「昔物語」と同一視され、さらには「原生動物」になぞらえられてしまう。今日、この説が全面的に支持されることはない。

鈴木一雄氏は、玉上論文において、短篇を積み重ねながら長篇化してゆくという生成・享受のありようが説明されている点を評価しつつも、『堤中納言物語』の諸短篇が『源氏物語』以前の素朴な短篇とは異質であること、しかも、『源氏物語』から派生したとおもわれる特徴があれこれと見出されることなどをおさえて、玉上説を批判している。<sup>2)</sup> 一九七〇～八〇年代における『堤中納言物語』の研究では、先の鈴木論文の短篇性の理解と軌を一にしつつ、殊に物語の方法を論ずる傾向がよまったようである。たとえば、高橋亨氏は、『堤中納言物語』の短篇物語の特徴を「長編的物語世界の解体

による構成的凝縮」と説明している。<sup>3)</sup> また三谷邦明氏も、長篇物語の〈断面化〉〈凝縮化〉の内実に迫り、特に〈引用〉〈くらべ〉〈あはせ〉〈隠喩〉〈パロディ〉等々といった方法を論じている。<sup>4)</sup> あわせて、テクスト概念の導入により、個々の短篇物語の〈読み〉も更新されていった。

そうした展開の途上にあつては、作品の生成・成立などの問題について正面から論じにくいという状況もあったように見受けられるが、『堤中納言物語』の場合、他の物語作品の研究と比べれば、生成された当時の状況を考察の対象とする論考が相対的に多いといえよう。とりわけ「逢坂越えぬ権中納言」は、周知のとおり天喜三年（二〇五五）五月の「六条齋院歌合」、すなわち祿子内親王家のいわゆる物語歌合（もしくは物語合）に、小式部の作としてその作品名と作中歌一首がみえることから、物語の生成・享受の具体的な「場」の問題に関する検討が積み重ねられてきたわけである。たとえば、神野藤昭夫氏は、その物語歌合にみえる十八篇の作品の共通性（常連メンバーの作であること、開催期日に関わる素材・発想、和歌に

由来する題号、薫に類似する男性主人公の登場等々)をとらえ、こうしたサロンにおいて生成・享受される物語作品群を物語史の展開の中に位置づけている。池田利夫氏も、平安後期、歌合などを頻繁に催すサロンの状況・環境と、「逢坂越えぬ権中納言」などに代表される短篇物語の構造(及びその形成)との因果関係を重視している。また、稲賀敬二氏は、作中の〈くらべ〉〈あはせ〉から、物語それ自体の生成・享受の具体的ありようとしてクイズの「場」を想定する。

後述することになるが、近年の「逢坂越えぬ権中納言」に関する諸論考でも、生成・享受の「場」との照応関係を探るという方向はより顕著になってきている。本稿でも、「逢坂越えぬ権中納言」について考察するにあたり、そうした照応を重視するつもりである。殊に、同時代のサロンにおける幾つかの催し、及びそれに関連する中心的人物が、物語世界内の催し、また作中の人物と対応する点を看過するわけにはゆかない。ただし、そうした照応関係に重点をおくとはいっても、これまでの諸論考とは相違する観点をも用意している。それを要するに、以下のA・Bの二点となろう。

A 六条斎院サロン関係の諸々の事象と「逢坂越えぬ権中納言」の物語本文との照応については、これまでもさまざまに論じられてきたが、実は完全には照応しない面も多い。それゆえに、複数の、また多様な照応関係が生まれることになるのではないか。

B これまでの議論では、祿子内親王、そして実質的にサロン文化を差配していたとおもわれる藤原頼通が注目されがちであったが、頼通以外の貴顕たちと物語世界内の男主人公との照応関係、あるいは物語を創作する女房たちと、物語世界内の女房たちとの相似関係などもあるのではないか。

本稿では、これら二つの観点を特に重んじて、「逢坂越えぬ権中納言」、ならびに頼通文化圏における物語文学の生成・享受に関する新たな理解へと到達することをめざす。

## 二 物語の内と外、それぞれの〈あはせ〉

まずは、「逢坂越えぬ権中納言」の物語内容を簡単に確認する。次の(1)〜(3)の三部構成、もしくは(1)と(2)とを一括して二部構成とみなすのが通例となっていよう。ここでは、便宜上三部に分けておく。なお、□で囲った人物は、一般に主要人物とされる。また、波線を付してあるのは、特に本稿の四節で重視することとなるであろう女房たちである。

(1) 五月三日 あらゆることに秀でる(権)中納言だが、思慕しても甲斐のない宮(姫宮)のことでもの思いに耽っている。そこへ誘いがあり、宮中の管絃の遊びに出席した。そのあと、中納言が中宮(中納言の姉か妹)の御方に参上すると、中宮付きの女房小宰相の君らの要請により、五月五日の菫蒲の根合で左

方の方人を任された。

(2) 五月五日〜六日 中宮の御方での根合当日、中納言の尽力に

より左方が勝利。根合につづき歌合も行われる。そこへ帝も渡御し、中納言の卓越性が確認される。翌日、宮のことがなおお

にかかる中納言は、宮に歌を贈るが、何の反応も得られない。

(3) 六月十余日 中納言は宮のもとへ来て、まず取り次ぎ役の宰

相の君と対面する。次いで宰相の君が内へ入るのに乗じて、中

納言もこっそり中へすべり込む。宰相の君は、中納言がいなく

なつたと思ひ込んでしまう。一方の宮は、中納言を前にして困

惑しつとも気強い姿勢を変えない。中納言は、結局、荒々しい

行動には出られない。

右のように、五月三日、小宰相らの要請により、男主人公の中

納言は、中宮方で五月五日に行われる根合に際して、左方の方人

を務めることとなった。一方、この「逢坂越えぬ権中納言」なる物

語作品は、天喜三年（一〇五五）の五月に開催された「六条齋院

歌合」にその名がみえる。厄介なのは、陽明文庫蔵・廿卷本『類聚

歌合』所収本文では、「五月三日」の「題 物語」とされた九番の

「歌合」であるのに対し、『後拾遺集』の八七五番歌の詞書では、

次の(A)のように「五月五日」に「物語合」があったとされている

点である。

(A) 五月五日六条前齋院に物語合しはべりけるに、小弁おそく

いだすとかたの人人こめてつぎの物語をいだしはべりけ

れば、宇治の前太政大臣、「かの弁が物語はみどころなど

やあらむ」とて異物語をとどめてまちはべりければ、「い

はかきぬま」といふ物語をいだす、とてよみ侍ける

ひきすつるいはかきぬまのあやめぐさ思ひしらずもけふにあふ

かな  
〔後拾遺集〕雑一、八七五〕

なお、この小弁が詠んだ歌は、次に掲げる天喜三年「六条齋院歌合」

の二一番歌（B）の三首め」とほぼ同一である。ただし初句に異同が

あり、かつは詠作の状況もかなり異なっている。

(B) いはかきぬまのがり  
中宮の出羽いで弁

さつきやみおぼつかなきにまぎれぬは花立ばなのかをりなりけ

り

かへし

たちばなのかをりすぐさずほととぎすおとなふこゑをきくぞう

れしき

又

ひきすぐしいはかきぬまのあやめぐさおもひしらずもけふにあ

ふかな

かへし

君をこそひかりとおふにあやめぐさひきのこすねをかけずもあ

らなむ

〔天喜三年「六条齋院歌合」、一九〜二二〕

小弁は、物語歌合もしくは物語合に提出された「いはかきぬまの中

将」の作者である。(B)の配列では、出羽弁と小弁の女房同士が歌合終了後にかわしたやりとりのようにみえるが、(A)の詞書は、おそろく「物語合」の進行中に「宇治の前太政大臣」頼通との緊迫したやりとりをふまえて詠まれた歌であることを示していよう。この大きな相違は甚だ興味深いのだが、ここでは、日付、及び歌合か物語合かという二点に焦点を絞る。近時、この問題を扱った神野藤昭夫氏の論考でも整理されているように、これまでの説はおよそ次の三つに分けられよう。

・『後拾遺集』の「五日」は誤りで、物語歌合・物語合の両方とも三日に行われたとみる説。

・それぞれの本文どおり、三日に物語歌合、五日に物語合があったとみる説。

・五日の開催予定が変更されて三日になったとする説。

なお、神野藤氏は、『後拾遺集』という勅撰集の美学・配列意識などによる改変の可能性を考慮し、「六条斎院歌合」本文が伝える情報を重視して〈あはせ〉の実態を想定している<sup>10)</sup>。

三日なのか五日なのか、また物語歌合か物語合かという問題は、いずれもきわめて重要だが、決定的な論拠を見出しがたい今、結論を急ぐことはひかえよう。ここで確認しておきたいのは、ほかならぬ「逢坂越えぬ権中納言」の物語内で「五月三日」から話がはじまり、「五月五日」に「根合」が催されたということである。諸注釈・諸論考の多くが指摘するように、こうした物語内の日付は、五

月三日または五月五日の、物語歌合もしくは物語合という催しを意識した設定であろう。

イ 「逢坂越えぬ権中納言」の物語世界内……某年五月五日、「中宮の御方」における根合、及びそれに付随する歌合。

ロ 「逢坂越えぬ権中納言」を生成・享受した史上の「場」……天喜三年五月三日または五日、斎院祿子内親王家における物語歌合もしくは物語合。

こうして並べてみると、かなりの点で重なることがわかる。物語の内側の〈あはせ〉は、当の物語を生成・享受する外の〈あはせ〉と照応する。典型的な入籠型といってもよからう。とはいえ、完全に照応するわけではない。両者とも歌合を伴う催しだが、〈物あはせ〉で番えられる物体が、物語中では菖蒲の根であり、天喜三年の方はもちろん物語である。

一方、〈物あはせ〉の照応ということで注目すべきは、同時代に催されていた幾つかの根合である。この遊戯は左右対抗で菖蒲の根の長短を競い合うものだが、宮中行事として確認できる初の例は、後冷泉朝の永承六年（一〇五一）五月五日の「内裏根合」である。天喜三年、「逢坂越えぬ権中納言」が物語歌合（物語合）に提出されるたった四年前であった。

さらにまた、無視しがたい根合の実例がある。永承五年（一〇五〇）と推定される、五月五日の「六条斎院歌合」である。わずか三番六首の小規模なものだが、「題 菖蒲」となっている。萩谷朴

氏の指摘するとおり、この歌合は「物合としての菖蒲根合に伴うものであった」と考えられよう。

ハ 史上の「内裏根合」……永承六年五月五日、殿上における後冷泉天皇主催の根合、及びそれに付随する歌合。

二 史上の「六条齋院歌合」(題 菖蒲)……某年(永承五年であろう)五月五日、齋院禊子内親王家における根合、及びそれに付随する歌合(であろう)。

右のようにまとめると、これまた先のイとほとんど重なるといつてよい。ハ・二のいずれの根合も、「逢坂越えぬ権中納言」の作者小式部が意識しなかったとは到底考えられまい。だが、さらに一步踏み込んで考えたい。中宮方で行われた物語内の「根合」は、結果として帝も渡御するものの、当初から大規模な盛儀として企画されたようには見受けられない。それに対してハの根合は、比較にならぬほど盛大であり、文字通り公的なイヴェントといひ得るであろう。一方、二の永承五年「題 菖蒲」の歌合の方は、ほかならぬ禊子内親王家の催しでもあり、ハの「内裏根合」よりもいっそう「逢坂越えぬ権中納言」の物語世界内の「根合」に近いかともおもわれるが、物語内の「根合」の主催者が、帝でもなければ齋院でもなくて、中宮であるという点は見過ごせない。これも照応しない点である。物語の中に見える五月五日の「根合」をめぐる、史上のイヴェントとして確認されるロ・ハ・二の(あはせ)との照応を確認しつつ、実は照応しない点をも逐一確かめてきた。完全には重ならない

からこそ、複数のイヴェントとの重なりが確保されるということになるのだとおもわれるが、それにしても物語世界内の催しと、当の物語作品自体を生成・享受する「場」に關係する複数の催しとの照応は、いったい何を意味するのだろうか。おそらく、出来事としての(あはせ)の照応だけではなく、これに關係する人たちの照應關係にも注意を払う必要があると予想される。次節では、物語世界内の中心的人物と、物語を生成・享受する「場」の中心的人物との対応について、多角的に検討してみよう。

### 三 物語世界内の人々と、

#### 物語を生成・享受する「場」の人々

前節で確認したような照應関係をふまえて、鈴木一雄氏は、「この短篇物語がものがたるのは「近頃」であり「現在」なのである」と指摘している。<sup>14</sup> たしかに、「逢坂越えぬ権中納言」という物語内の(あはせ)は、数年以内の過去の(あはせ)、もしくは当の物語自体が披露されたと思しき物語歌合(物語合)と照應するのであるから、ひとまず、十一世紀中葉という「現在」を描く物語といひ得るのだろう(ただし、この点についてはあとで検討を加えたい)。仮にそうした前提に立てば、物語内の人物に照應すると考えられる史上の人物たちも、「逢坂越えぬ権中納言」が書かれた当の時代の人ということになる。

「逢坂越えぬ権中納言」において主要人物と目される人は、前節



実は、天喜三年五月の裸子内親王家における物語歌合に参加した女房たちをみると、すべて裸子付きの女房というわけではなく、皇后寛子、中宮章子、祐子内親王といった頼通に繋がる各宮の女房たちもメンバーに加わっている。たとえば、前節で掲出した(B)の物語歌合にみえる「中宮の出羽弁」は、おそらく中宮章子に仕える女房であろう。同歌合の五番左「あらばあふよのとなげく民部卿」の作者「出羽弁」と同一人物である可能性も高い上、この物語歌合もしくは物語合の中心的メンバーと目される<sup>16)</sup>。また、各宮の女房たちの中には、頻繁に催された六条齋院家での歌合にたびたび参加している者もいる。

このようにみてくると、「逢坂越えぬ権中納言」という物語世界の中で「根合」を主催している「中宮」は、やはり皇后寛子あるいは中宮章子と重なる面がありそうだが、〈へあはせ〉の主権者という点では、たとえば裸子内親王ともまったく重ならないわけではない、といえよう。神野藤昭夫氏も言及しているように、「当代の後宮文化圏」は、頼通を頂点とする「血族的紐帯によって結ばれて」いたことは間違いないであろう。要するに寛子、章子、祐子、裸子の四人の宮（宮家）の女房たちはゆるやかに繋がっており、サロンとしても地続きであったと考えられる。そして、こうした拡大化したサロン文化圏こそが物語の生成・享受の基盤ともなったのであったろう。

\*

さて、次に「逢坂越えぬ権中納言」の男主人公が思慕する「宮」

について検討してみよう。神尾暢子氏は、史上の「権中納言」に関する調査に基づき、「源氏物語（葵）」の朝顔の姫君を思慕する光源氏を「逢坂越えぬ権中納言」の「準拠」であるとした上で、裸子内親王を「逢坂越えぬ権中納言」の姫宮に、擬定してもよいのではあるまいか」と述べている<sup>18)</sup>。そのように理解するとき、裸子が齋院であることから、物語中の「姫宮の態度が冷淡で、権中納言に、逢坂を越えさせないことも、納得できる」という。また近年では神野藤昭夫氏も、「一瞬」ながら「姫宮があたかもサロンの女主人公齋院（裸子内親王）」と等価でありうるような暗黙の図式が隠されている」と述べている<sup>19)</sup>。神野藤氏によれば、理想的な男君が高貴な女性に拒否され嘆くという筋立てこそが、「賀茂の神に奉仕する身として、恋愛の成就がタブーであった齋院世界にふさわしい物語文法」にあたる」と説明される。

神尾氏のように、作中の「中納言」と「宮」との関係を『源氏物語』の光源氏と朝顔の姫君の關係に重ねてみるのはかなり無理がありそうだ。特に「中納言」については、光源氏よりも薫、柏木、夕霧などの方が近いという異論があるろう。一方、作中の「宮」についてはどうか。「宮」が齋院であるなどということは、本文中ではいっさい示されないし、両者を結びつけるような有力な論拠があるわけでもない。しかし、物語世界内の催しにしても、それに関わる人たちにしても、史実に照らすと、いささかずらされながらも照応するということが多々確認されることからすれば、たしかに、作中の

「宮」と祿子という宮（内親王）とが重なりあう面があることはみとめてよいとおもう。

\*

それでは、物語世界の主人公（権）中納言は如何であろうか。いま述べたように、光源氏という『源氏物語』の主人公を重ねる説には従いがたいものの、「権中納言」という令外の官には、光源氏のように特別な出世をする人物という印象があるろう。神野藤昭夫氏も、「出世街道を駆け登ってゆく若き貴公子のイメージが託されている」可能性を述べている。井上新子氏は、十一世紀中葉あたりまでの「権中納言」の実例を精査した上で、まずは「逢坂越えぬ権中納言」の「権中納言」が「撰閲家の嫡男として設定された」ともと解する。そして、寛弘六年（一〇〇九）、「権中納言」に昇進した藤原頼通に注目し、「物語歌合」の実質的主催者ともいえるこの人物の若き日の経歴が、「逢坂越えぬ権中納言」の主人公の設定に反映していることを論ずる。井上論文では、さらに「作中の歌合と物語発表の場における物語歌合とが二重写しになること」によって、「作中に形象された祝意が物語歌合の場をも包括する祝意へと変質拡大」することを想定した上で、「逢坂越えぬ権中納言」が、頼通（あるいはその周辺）に対する祝意の具象化、すなわち〈賀の物語〉として位置づけられる。井上氏は、また別の論考で、「逢坂越えぬ権中納言」の「根合」の場面と、頼通の文化活動の一環に含まれる頻繁な歌合の史的空間との関わりについてより詳細に論じて

いる。「逢坂越えぬ権中納言」の「根合」の場面が、物語歌合の実質的主催者たる頼通を強く意識したものであることは了解できよう。その場面での寿ぐ機能が、当の物語が発表された場にまで及んでいるというとらえ方も、おそらく妥当であろう。

ちなみに、物語の中では、「権）中納言」の年齢について「廿に一二ばかりあまり給らむ」（四丁オ）とあった。井上氏も確認しているように、頼通は寛弘六年から長和二年（一〇一三）、すなわち十八歳から二十二歳まで権中納言であったから、年齢上の照応もみとめられよう。

物語作品の主人公格の男性たちと、その物語制作をバックアップする実力者との照応関係というのは、実は平安時代の仮名の文学を読み解く上できわめて重要な課題でありながら、未解明のまま今日にいたっているようにおもわれる。本稿では、他のさまざまな例にまで言及する余裕はないが、具体例をひとつだけ挙げておきたい。

『紫式部日記』というテキストがある。過剰なまでに『源氏物語』あるいはまた物語文学に関するあれこれの情報を織り込んであるようだ。しかし、一九七〇年代以降、いわゆる「テキスト論」の盛行によって『源氏物語』と『紫式部日記』の両者の言葉をともし響かせるような読み方はしばらくタブー視されてきたかの如くであった。今後は——方法上の困難はあるとしても——両テキストを積極的に関わらせてゆくような議論が望まれよう。たとえば、『紫式部日記』の冒頭からしばらく読みすすめてみると、土御門邸の秋のたたずま



いから始まり、中宮彰子が身重の苦しみをさりげなく隠している有様がとらえられる。次に未明の大規模な御修法の様が書かれたのち、明け方の「殿」(道長)とのやりとりが記され、さらにつづけて当時十七歳の「三位の君」(頼通)の姿が描かれる。このような形で、冒頭から撰閲家の主たる面々のありようが提示されるわけだが、物語文学との関わりでは、特に頼通の書かれ方がかなり重要ではないか。

(C) 年のほどよりはいとおとなしく、心にくきさまして、「人はなほ、心ばへこそ難きものなめれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、をさなし、と人のあなづりきこゆるこそ悪しけれ、と恥づかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「おほかる野辺に」とうち誦じて、立ちたまひにしさまこそ、物語にほめたるをとこの心地しはべりしか。(一一二六頁)

ほかならぬ『源氏物語』という大きな物語を創作している紫式部、しかも道長という権力者からの支援を受けて『源氏物語』の豪華本制作にも取り組んでいた紫式部が、道長とその後継者たるべき頼通のありようを「物語」的に書き記している。殊に頼通は、波線部のように「物語にほめたるをとこの心地」とまでいわれている。実際の頼通の姿、ふるまいなどが理想的であったかどうかが問題なのではない。『源氏物語』を創作した人が、その制作を支援する権力者の後継となるはずの頼通を、物語内の理想的な男君とかぶせようとする意図が明白であること——そこが問題であろう。このような撰

関家の嫡男と物語の男主人公との対応というのは、『紫式部日記』に固有の問題ではあるまい。十世紀後半の私家集なども含めて検討すべきことであろう。とにかく、「逢坂越えぬ権中納言」の物語読解においても、そうした類の対応がより正確にとらえられるべきではないか。

右のようなわけで、「逢坂越えぬ権中納言」の男主人公と頼通とを重ねる姿勢はひとまず肯定すべきだと考える。ただし、史上的人物との関わりを考える際、頼通一人に絞ってしまうことは有効だろうか。前節において、史上の催しとの対応が一对一でないこと、照応が完全になることはないことを確認してきたわけだが、人物の対応もやはり一つの准拠、一つのモデルというようなものを想定してしまうと、かえって作品本体の特性から離れてしまうようにもおもしろい。また、先の井上論文の場合、物語の中心を前半部に絞りすぎているきらいがあるのではないか。天喜三年時点で頼通は六十四歳である。かたや物語後半部の男主人公について、直接のモデルを探し出すことなど、まず無理であろう。「逢坂越えぬ権中納言」が「現在」を描く物語かどうか、という点については前節でも言及したが、完全な「現在」を描くということでもないだろうし、また若き日の頼通をモデルにしている、などということも積極的とはいえないようにおもう。要は、作中の世界を頼通という史上の人物一人のみに引きつけすぎてしまっただけは、かえって見えにくくなるのである。そこで、あらためて「権中納言」というポストに留意し、頼通

以外の撰閑家の嫡男が、「逢坂越えぬ権中納言」の男主人公と重なる可能性をも探っておきたいと考える。たとえば、井上論文でも注意が向けられていた頼通男の通房、あるいは師実あたりとの照応をあらためて検討してみるべきではないか。

藤原通房は、万寿二年（一〇二五）生まれで、母は源憲定女。実は、憲定女は姉と二人で頼通に仕えてきた女房であった（出産後は、頼通の女房として出仕することができないでいた）。頼通の正妻隆姫に子がなかったことから、通房は嫡男として異例のスピード出世を遂げる。長暦三年（一〇三九）に十五歳で権中納言、長久二年（一〇四一）には権大納言にまで昇進してしまう。『栄花物語』では、元服直前の通房（十一歳）が、長元八年（一〇三五）の高陽院水閣歌合にてその存在感を示している事例が記されている。

(D) 長元八年五月、三十講果てて、関白殿歌合せさせたまふ。殿上の人々を分たせたまふ。〔中略〕…さまざまに挑みたるほどに、同じ月の九日に、殿上の童を書き分たせたまへり。左には殿の若君、行任が子、範国が子、章任が子、右には家経が子、範永が子、頼国が子分たせたまへり。〔中略〕…左右挑みて方分ぎけるほどに、殿の若君左によりたまひにければ、挑まんなかなかななり、とて右はただおいらかななり。

（詞合、三一二四四〜二四八頁）

波線部のような事態は、「逢坂越えぬ権中納言」の「根合」の場面に直接関わるような事例とはいいがたいが、〈あはせ〉の場におけ

る通房の存在感は、物語にも通ずるところがある。

通房は将来を囑望されていたようだが、寛徳元年（一〇四四）、流行病により二十歳で亡くなってしまふ。『栄花物語』「くものふるまひ」巻の巻頭では、通房の死と人々の哀しみが詳しく語られている。その通房の死に関連して、祐子内親王家女房の小弁が、通房の死を哀悼して詠んだ歌が『後拾遺集』に撰ばれていることに注意しておきたい。

(E) よのなかはかなくて右大将通房かくれ侍ぬとききて

小弁

かずならぬ身のうきことはよのなかになきうちになにいらぬなりけり

（『後拾遺集』雑一、九〇〇）

小弁は、天喜三年の物語歌合にも参加していた女房であり、前節で引用した(A)『後拾遺集』の八七五番歌、及び(B)「物語歌合」の二〇・二一番歌の作者でもある。(A)の詞書によれば、特にその創作能力が頼通から高く評価されていたようであるし、(B)においても、中宮の出羽弁が小弁の提出作品「いはかきぬまの中将」を評価している。さらに興味深いのは、この小弁が、「逢坂越えぬ権中納言」の作者小式部とかなり親密であったことがうかがえる点である。『後拾遺集』に撰ばれている小式部の歌は計二首で、いずれも小弁との親しげな贈答となっている。「逢坂越えぬ権中納言」の作者小式部が、天喜三年からみて十一年前に亡くなっている通房との直接の接点をもったかどうかは判然としないが、通房と小弁、そして小弁と小式

部というそれぞれの繋がりから鑑みて、「逢坂越えぬ権中納言」の創作時に、通房という夭折した貴公子のことが意識された可能性は考えられるのではないだろうか。

なお、通房は二十歳で死亡している。「逢坂越えぬ権中納言」における、「廿に一二ばかりあまり給らむ」(四丁オ)という年齢設定は、もちろん通房と合致しない。しかし、二十歳で亡くなったがゆえに、二十歳の若き日のまま記憶される通房の理想的なイメージを天喜三年時点の「現在」の物語に少しずらして移植するということも、物語作者には不可能なことではあるまい。

また、いっそう想像が飛躍することになるうが、師実についても言及しておこう。師実は長久三年(一〇四二)の生まれ、元服が天喜元年(一〇五三)のことであり、天喜三年の物語歌合の時点ではまだ十四歳にすぎないが、天喜四年(一〇五六)に、兄通房と同じく十五歳で権中納言に昇進している。つまり、「逢坂越えぬ権中納言」創作の直後に権中納言となった貴公子である。もちろん、物語のモデルとして考えることはできないのだが、あるいは天喜三年の時点で、師実のこれからの活躍を見越して物語が生成された、と解してみることも可能であろうか。なお、師実の母は、四条宮寛子と同じく藤原祇子とされる。祇子は源倫子に仕えたのち、頼通の妾妻となった。出自にはいくつかの説があるが、具平親王の落胤たる源(藤原)頼成(藤原伊祐の養子)の女と考えられる。先の通房の母といい、こうして頼通近辺の女房たちが、撰関家の嫡男、あるいは

のちの皇后などを生んできたことについては、次節であらためて言及することとなる。

ここまで、「逢坂越えぬ権中納言」の作中人物のうち、特に「中宮」「宮」「(権)中納言」について、当の物語を生成・享受する「場」の関係者たちとの照応関係を検討してみた。准拠説・モデル説などを提唱しようということではなく、あくまでも重なりがありそうな例をひろく集めるような方向でみてきた。厳密に特定の准拠・モデルの類を絞ってゆくような見方は、おそらく「逢坂越えぬ権中納言」のような作品を理解する上では有効ではない。頼通が関わる文化サロン全般の中から、いろいろな照応がみえてきたようにおもう。

天喜三年の時点で、頼通、ならびに寛子、章子、祐子、禊子の各宮(宮家)の関係者たちが「逢坂越えぬ権中納言」という物語を読んだとき、いったいどんな反応を示したのか。我々はただ想像するしかないが、おそらくは、生成・享受の「場」に関わる人々との、微妙な重なり具合をたのしみながら享受したのでろう、とおもわれる。そのように関係者たちの片鱗をあれこれと見つけ出すような読み方で、たとえば、頼通とか、各宮家の女主人たちをおもわせるような一面をそなえた作中人物に親しみをおぼえながら読むこととなる。井上氏が提唱した、頼通に対する〈賀の物語〉性というのはたしかにみとめられようが、物語の読まれ方としては、すべてが祝

意へと回収されるわけではなからう。

#### 四 物語世界の女房たちと、物語を生成する女房たち

前節まで、物語の世界内と、当の物語を生成・享受する側との照応関係のあれこれを検討してきたわけであるが、なお検討しのこした問題がある。すなわち、「逢坂越えぬ権中納言」の物語世界の中でさまざまな言動を示している女房たちと、天喜三年の物語歌合において、あるいはまたほかの歌合などでも活躍している女房たちとの対応関係についてである。二節の初めの方にまとめた、物語内容の紹介文にも示したが、この「逢坂越えぬ権中納言」においては、「中宮」方の女房と「宮」の女房とが登場している。作中の女房たちのうちで、男主人公の「中納言」に対し、かなり親しげに接しようとしているのは前者、つまり中宮方の女房たちだが、その中でも小宰相の君は際立っている。中納言が「根合」に参加することとなつたのも、そもそものは小宰相のはたらきかけによる。次に掲出する①③の本文が示唆するのは、二人のきわめて親密な関係であろう。

① 御遊びはて、中納言、中宮の御方にさしのぞき給つれば、わかき人く、こちよげにうち笑ひつ、「いみじき方人参ら

せ給へり。あれをこそ」などいへば、…〔中略〕…「あやめも知らせ給はざなれば、右には不用にこそは。さらばこなたに」  
とて、小宰相君、おしとり聞えさせつれば、御心もよるにや、

「かう仰せらるゝをりも侍けるは」とて、にくからずうち笑ひて出で給ぬるを、例の、つれなき御けしきこそわびしけれ、かゝるをりは、うちもみだれ給へかし、とぞ見ゆる。(二丁オウ同ウ)

② 中納言、さこそ心に入らぬけしきなりしかど、その日〔五月五日ノ根合当日〕になりて、えもいはぬ根どもひき具して参り給へり。小宰相の局にまづおはして、「…〔中略〕…」とあるぞたのもしき。いつの間に思ひ寄りける事にか、いひ過ぐすべくもあらず。(三丁オウ同ウ)

③ ……上〔二帝〕聞かせ給ひて、ゆかしうおぼし召さるれば、しのびやかにて渡らせ給へり。宮〔中宮〕の御覧する所に寄り給て、「帝」をかしき事の侍けるを、なかか告げさせ給はざりける。中納言、三位など、方分かるゝは、たはぶれにはあらざりけることにこそは」との給はすれば、「中宮」心に寄る方のあるにや、分く、とはなけれど、さすがにいどましげにぞ」など聞こえさせ給。(帝)「小宰相、中将がけしきこそいみじかめれ。いづれ勝ち負けたる。さりとて、中納言負けじ」など仰せらるゝや、ほの聞こゆらむ、…

(五丁オウウ)

多くの物語において見出される、貴公子と親しげな女房たちとの関係、そのややくだけた様子を、この物語も描きだしている。女房たちの中納言に対する好意と賞賛は顕著であるが、特に①の傍線部か

らは、貴公子の「みだれ」さえも望んでしまう、女房たちの好色性がみてとれる。この①に示されている女房の不満は、文脈からみて小宰相その人に焦点化して生まれた言葉と解してもよからう。また、②に示された中納言に関する高い評価は、これまた小宰相の局での言動を直接うける文言であり、やはり小宰相に焦点化して生まれた言葉と解せる。一方、③の二つの傍線部は、それぞれ中宮及び帝の発言中にある。さりげない言い方ではあるが、先の①・②の傍線部などとあわせてみても、中納言と小宰相の関係がかなり親密であり、召人であることを示唆しているようにもおもわれる。

一方、物語後半の「宮」付きの女房、宰相の君はどうか。この女房は、中納言の来訪を受けた際、宮へ取り次いでいる隙をつかれ、中納言に侵入されてしまうという失態を犯す。しかも、その後、中納言の侵入にはいっさい気づかぬままである。

④宰相の君、出で、見れど人もなし。かへりごと聞てこそ出で給はめ、人にも、給なめり、と思ひて、しばし待ち聞こゆるに、「中納言ハ」おはせずなりぬれば、中くかひなきことは聞かじ、などおぼして、出で給にけるなめり、いとほしかりつる御けしきを、われならば、とや思ふらん、あぢきなくうちながめて、内をば思ひ寄りぬぞ、心おくれたりける。(九丁オ)

ここで注意したいのは、傍線部「われならば」である。宮が中納言に対していつも冷淡であることを受け、「私ならば中納言を帰さずにお相手をするのに」といった勝手な欲望をいだきつつあるようだ。

この宰相の君にも、中納言にひかれてしまう好き心がある。この④の傍線部をめぐって、山岸徳平氏は、「われならば」と「野心めいた思いを、胸の奥に燃やした」ことを批判する。たしかに、宰相の君は失態を犯している。だが今、問題にしたいのは傍線部のような感情そのものである。女房が、「われならば」とおもふことは、「野心めいた思い」として否定されるべきなのか。ここで、前節でとりあげた頼通の妾妻たちを想起しよう。源憲定女(通房の母)であり、藤原祇子(寛子・師実の母)である。いずれも頼通に仕える女房格であった。女房の立場で撰関クラスの貴顕と関わりをもち、気に入られ、さらには子までなすという実例が身近にある。当然、遠からぬ将来にそういう事態の到来を期待する女房がいてもおかしくないだろう。

また、そうしたことは、頼通などの撰関に仕える女房はもちろんのこと、寛子・章子・祐子・裸子などの宮(家)に仕える女房たちにもあてはまるであろう。たとえば、頼通と親密であった「宇治大納言」こと源隆国は、物語歌合でも重要な役を務めていた出羽弁とかなり親しかったらしく、出羽弁が親を亡くした際に交わした贈答歌が『後拾遺集』に入っている(哀傷、五五六・五五七)。また、物語歌合の参加者の一人であり、『狭衣物語』の作者と考えられている六条斎院宣旨は、隆国の妻となった可能性が高い。<sup>28)</sup>

これまで、女房と姫君、女房と北の方などの身分の違いというのが絶対的な差として理解されがちであったようにおもわれる。し

かし、きわめて高貴な姫宮などに仕える上臈の女房は、親王の娘、また公卿の娘であったりすることも多い。女房たちを女房たちだけで囲い込んでしまうような把握は、おそらく正しくない。肝心なのは、物語世界の中にしばしば出てくる、好色な性格の女房たちが、物語の生成・享受されるサロンに所属する女房たちとも、ある種の連続面をもつ可能性ではないだろうか。既に論じたように、色恋に關わる物語の生成の根本には、語り手でもあり聴き手でもある女房たちの「へいろごのみ」があると考えられるからである。物語世界内に存在する女房たちと、頼通の差配するサロンにおいて高貴な女宮たちに仕えながら物語を生成する女房たち、その照応こそがとらえられなくてはならないと考える。しかし、女房たちの私的レヴェルのあれこれを確認し得る資料は乏しく、しかもその多くはほかならぬ物語・日記・歌集などの仮名を用いた文学作品ということになりそうだ。女房に関しては、より広汎にして緻密な研究を要するであろう。

## 五 二つの世界を行き来する——むすびにかえて——

以上、「逢坂越えぬ権中納言」を対象として、物語世界の中と、当の物語そのものを生成・享受する「場」との対応関係をなるべく多角的にみてきたつもりである。准拠あるいはモデルを一つに絞って込んでゆくような考察は、「逢坂越えぬ権中納言」の読解にはふさわしくないようだ。物語の内と外とのさまざまな要素を適宜ずらし

ながら幾重にも重ねてゆくという傾向がはつきりみられる。「歴史」と「虚構」という言い方をあえて使うならば、「逢坂越えぬ権中納言」では、物語という虚構の世界と、その虚構を生成・享受する歴史的世界とを自由に行き来できるように仕組まれている。そして——歴史的存在としてはあり得ないもの——もしかするとあり得るかも知れないような、少しずれた自分たちを形象化し、たのしむことができる。サロンを差配する人間も、またサロンで物語を作ったり読んだり、出入りする男君と付き合ったりしている女房たちも、そうした二つの世界を遊ぶことができるのだろう。特に女房たちについては、高貴な人たちとも連続しながら、一方では作中の好色な性格の女房たちとも相通ずるものをもっているのではないかと、いうことを予告的に述べたが、その総括的な研究は、今後の課題とする。

※歌集・歌合の引用本文は『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、

『紫式部日記』及び『栄花物語』の引用本文は、いずれも新編日本古典文学全集本（小学館）に拠る（個々の引用本文ごとに付した（ ）内の頁数なども同じ）。なお、私に表記などを改めている場合がある。

※『堤中納言物語』『逢坂越えぬ権中納言』の引用本文は、高松宮家蔵本の影印に拠る。この本文をなるべく尊重しつつ、諸本の影印、及び諸注釈書の校訂本文などを参照した上で、私に校

訂した。

注

- (1) 玉上琢彌「昔物語の構成」(『源氏物語研究 源氏物語評釈 別巻一』、角川書店、一九六六年初出は一九四三)。
- (2) 鈴木一雄「『堤中納言物語』序説——物語文学史における定位——」(『堤中納言物語序説』I、桜楓社、一九八〇)。
- (3) 高橋亨「堤中納言物語の世界——短編性について——」(『三谷栄一・今井源衛編『鑑賞日本古典文学 第12巻 堤中納言物語・とりかへばや物語』、角川書店、一九七六)。
- (4) 三谷邦明「堤中納言物語の表現構造——引用・パロディ・視線あるいは『逢坂越えぬ権中納言』の方法——」(『物語文学の方法II』第四部「第三章、有精堂、一九八九」)。
- (5) 神野藤昭夫「斎院文化圏と物語の変容」(『散逸した物語世界と物語史』III—8、若草書房、一九九八)。
- (6) 池田利夫「現代語訳対照 堤中納言物語」(旺文社、一九七九)の「解説」。
- (7) 稲賀敬二「堤中納言物語をめぐる二、三の問題——物語享受の一形態・仮説——」(『源氏物語の研究——物語流通機構論——』第一部一五、笠間書院、一九九三)。
- (8) 陣野英則「物語作家と書写行為——『紫式部日記』の示唆するもの——」(『源氏物語の話しと表現世界』III—第十四章、勉誠出版、二〇〇四) 初出は一九九九、同「『堤中納言物語』」このついで「の聴き手たち——物語文学の享受の一面——」(『古代中世文学論考 第九集』、新典社、二〇〇三)、同「『堤中納言物語』」ほどの懸想」論——「ほどの読者たち——」(『国文学研究』一四六、二〇〇五・六)、同「『源氏物語』の言葉と手紙」(『文学』七二五、二〇〇六・九)などでも、物語の内と外の女房という観点から論じている。

『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」論

- (9) 物語の題号は「権中納言」だが、物語本文中ではすべて「中納言」とある。
- (10) 神野藤昭夫「天喜三年六条斎院歌合「題 物語」考——その開催期および開催形式と物語との関係について——」(中野幸一編『平安文学の風貌』、武蔵野書院、二〇〇三)。
- (11) 天喜三年「六条斎院歌合」に関する議論は、近年もお活発である。注(10)、前掲論文のほか、三原まきは「藤子内親王家歌合の基礎的研究——開催年次再考——」(『和歌文学研究』七九、一九九三)、同「藤子内親王家歌合の性格」(『学習院大学国語国文学會誌』四三、二〇〇〇・三)、中野幸一「六条斎院藤子内親王家の「物語合」について——その発見時の成果の再吟味——」(『桜文論叢』五一、二〇〇〇・八)、樋口芳麻呂「小弁が物語は見どころなどやあらむ」及び井上新子「天喜三年六条斎院藤子内親王家物語歌合について——物語の形成と史的空間の反映——」(いずれも、王朝物語研究会編『論叢 狭衣物語2 歴史との往還』、新典社、二〇〇一)などがある。
- (12) 荻谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂 第二巻』(同朋舎出版、一九九五)、九九八頁。
- (13) 注(12)、前掲書、九九九頁。
- (14) 鈴木一雄「『堤中納言物語』覚書」(注(2)、前掲書、III)。
- (15) 鈴木一雄「『逢坂越えぬ権中納言』について——作者と成立——」(注(2)、前掲書、II) 初出は一九四九。
- (16) 稲賀敬二「物語の系列化集合論と「堤中納言物語」の段階的形成過程・仮説——道長の時代から頼通の時代へ——」(王朝物語研究会編『研究講座 堤中納言物語の視界』、新典社、一九九八)は、出羽弁が物語合のディレクター的存在であり、かつこの人が「堤中納言物語」の系列化構想を練ったという可能性まで想定している。
- (17) 注(5)、前掲論文。
- (18) 神尾暢子「官職呼称の人物映像——堤中納言の権中納言——」(『王朝国

